

1980 年以降のディケンズ批評

Alexander Welsh のディケンズ批評

Alexander Welsh's Dickens Criticism

新野 緑

Midori NIINO

はじめに

1980 年以降の批評においては、理論の興隆、なかでも、人種、ジェンダー、階級を手がかりに、文学作品に浸透する「政治性」を読み解く新歴史主義批評や帝国主義批評、そしてジェンダー批評などの台頭が著しい。文学作品とそれ以外のテキストを同じ文化的言説と見て均質に論じるその批評では、「個人」はさまざまな言説の結節点に過ぎず、独立した人格は認められない (Cf. 村山氏の発表)。このシンポジウムが、個人の批評家ではなく、方法論を軸に複数の研究者を取り上げる形で計画されたのも、そうした批評の潮流を反映したものでらう。最初に振り当てられたのは、フェミニズム批評だったが、あえて Alexander Welsh という個人の批評家を取り上げることにした。なぜか。

たしかに、ディケンズにおける「女性」の問題は、最近著しい成果を上げている領域の一つだ。従来の批評では、ディケンズ小説のヒロインは、あまりに理想化されすぎて実在感を欠くと批判され、わずかに主人公を脅かす脇役の violent women が、作者の女性観に奥行きを与えるものとして肯定的に論じられるにすぎなかった。しかし、その面白味のない「家庭の天使」型のヒロインの見直しも含め、19 世紀ブルジョワ社会における一種の「他者」としての「女性」の意味を問うことは、最近のディケンズ批評の重要な一部となっている。

たとえば、Michael Slater の *Dickens and Women* は、伝記と作品を巧妙に用いながら、社会の弱者としての女性に対する作家の共感や矛盾を論じ、ディケンズの文学的想像力の一面を明らかにした好著と言える。また、Claire Tomalin の *The Invisible Woman* は、モラルを重視するヴィクトリア朝において、公の記録から抹殺されたディケンズの愛人 Ellen Ternan の人生を発掘、再構築し、John Forster の *The Life of Charles Dickens* 以来、ディケンズの伝記にひそかに浸透す

る家父長的視点を女性の観点から見なおす新しい伝記の試みである。Patricia Ingham の *Dickens, Women & Language* は、より理論的な立場から、ジェンダーや階級イデオロギーの媒体としての言葉が生み出す記号として、ディケンズの「女性」を読み解こうとする。Hilary M. Schor, *Dickens and the Daughter of the House* のように、ディケンズの「good women」がひそかに抱える攻撃性と彼女たちの家父長制からの逸脱の過程を、語りの authority の断絶やゆらぎを通して読みとる研究や、ディケンズの家庭像をジェンダーとの関わりから論じる Catherine Waters, *Dickens and the Politics of the Family* などの gender politics による批評。そして、Nina Auerbach の *Dombey* 論や、Mary Poovey の *David* 論のような単発の論文、あるいは単行本の一部をなす論文となると、あまたの成果がある。

したがって、「女性」の問題を論じたこれらの研究の流れを整理することは、重要な作業ではある。けれども、それをフェミニズムという名のもとに一つにくくりにくく微妙な居心地の悪さを感じるのは、批評理論が今ほどの興隆を見せてもいなければ、細分化されてもいなかった 70 年代にディケンズを読み始めたせいかもしれない。複数の批評家が「フェミニズム」という一つの理論的枠組みを共有することよりも、さまざまな批評の枠組みが交錯する中で、個々の批評家がどのようにその「個」の特質を（たとえそれが多様な批評理論の混交の度合いの違いであるにせよ）形作っているかに、興味を引かれる。

いずれにしても、Welsh は、最初のディケンズ論である *The City of Dickens* (以下 *The City*) で、Nell や Florence、そして Agnes といった典型的な「家庭の天使」型のヒロインの 19 世紀文化や小説における意味づけと再評価を行ない、フェミニズム批評に影響を与え、*From Copyright to Copperfield* (以下 *Copyright*) では、King Lear と Cordelia を Dombey と Florence の父娘関係を解く手がかりとして、「女性」の問題を論じた。そして、*Dickens Redressed* (以下 *Redressed*) において、*Bleak House* における Esther の語りに触れながら、

For one narrative Dickens adopted the method of his *Copperfield*—and in the widest sense, the plot—but in the process redressed himself as a woman. These days we would say that the author cross-dressed as Esther Summerson, his new narrator.
(*Redressed*, xiv)

と、その表題自体が最近のジェンダー論を意識していることを示している。もちろん、本の表題を cross-dressed ではなく、redressed としたのは、Welsh がジェンダー論に限定されない、より広い分野や方法を目指している証しだろう。しかし、彼の批評がフェミニズムの範疇に収まらないとしても、そこに最近のフ

エミニズム批評に関わるいくつかの要素は見出せるから、Welsh を論じることで、求められた役割の一端は果たせよう。

80 年以降の批評を振り返ると、Gissing, Orwell, Chesterton あるいは、Edmund Wilson や F.R. Leavis のように、従来のディケンズ像を大きく変え、以後の研究を方向づけるような批評家は少ないかもしれない。その意味でも、新歴史主義批評のいわゆる「個人の消失」は実証されつつあるのだろう。しかし、これだけ多くのことがすでにディケンズについて言われ、しかも、批評理論の興隆によって議論の厳密さが強く求められる今日、批評家の大きさを測るのにも以前とは異なる尺度が必要となる。Welsh は、*Don Quixote* から Freud まで、さらには語りや言語表象の問題から都市の実像や 19 世紀のコミュニケーションを扱う文化論まで、ディケンズに限定した 3 冊を含めて単著だけですでに 9 冊の研究書があり、個別に取り上げるに足る研究者と思われる。Welsh という個人の批評家の軌跡をたどることで、80 年以降のディケンズ批評の特質を考えてみたい。

1. 歴史と文学—*The City of Dickens*

Welsh の最初の本格的なディケンズ論は、1971 年に出版された *The City* である。80 年以降という主旨からは外れるが、Welsh の全体像を把握するために少し触れておこう。

In this book I have treated the city of Dickens both as an historical reality and as a metaphor that provides a context for values and purposes expressed by the English novel. (The City, v)

という「序文」の言葉から明らかなように、ディケンズ小説における「都市」のイメージを探るこの研究は、文学作品を一人の作家の個人的な経験や独創的な想像力の産物ではなく、時代の歴史的現実や文化的価値の表象の場として捉えようとする。それは、ディケンズ研究の多くが、まだ作品それ自体や作家の想像力のあり方に焦点を当てていた 70 年代初頭にあって、80 年代、90 年代の文化論的な研究を先取りするものだった。

Welsh はまず、これまで諷刺の対象とされた「都市」が、19 世紀になって科学的な調査と治療を必要とする“systematic problem”とみなされるようになった過程を、産業革命以後の都市の急激な巨大化と、それにとまなう個人の力の衰退、そして全体経済や衛生管理への依存といった歴史的現実から探る（衛生管理や警察組織といったテーマは、後に新歴史主義批評の興味の中心を占めるが、Welsh は power politics の問題には踏み込まない）。現実社会に解決策を持たないこの“problem”としての「都市」は、伝統的な聖書の「天上の都」に対する「滅

びの町」と人々に意識された。しかもキリスト教信仰が薄れつつあった時代に、明確な像を結ばない「天上の都」に代わって、「滅びの町」からの避難所として「家庭」とその中心をなす「女性」が求められたのだと、Welsh は言う。さらに、ディケンズの主人公を、神（作家）に選ばれた「選民」、あるいは天上の都を目指す地上の「都市の逗留者」と定義し、この主人公に避けがたい「死」を受容させ、同時に他者の記憶の中で生きるという再生の道を指し示す「死の天使」としてのヒロインの役割を明らかにする。そして、多くが結婚、つまり男性と女性の結合で終わる 19 世紀小説の結末を、小説の終わりという一種の「死」の受容と、そこからの救済を示す手段と結論づける。

この本における Welsh の関心は、まず何よりも、文学的表象と歴史的現実、そして人々の心に浸透し、その価値観を形作るさまざまな思考の枠組みやイメージとのダイナミックな影響関係にある。たとえば、ディケンズの都市に蔓延する「死」のイメージと靴墨工場でのトラウマとの連関を、

Yet this degree of morbidity the novelist was ready to share with his public; the inspiration may have been private, but its expression was sanctioned by the folklore of the city and its association with death.

(*The City*, 60)

と説明して、文学表象を産み出す力が、作家の個人的な経験や想像力ではなく、当時の歴史的現実や、人々の意識、無意識に浸透する文化の枠組みにあると主張する Welsh は、「文学」に対する文化や歴史の優位を語っているように見える。

とはいえ、たとえば 19 世紀における「家庭」が、「都市」という「滅びの町」からの避難所として機能したことを示しながら、

As the historian Philippe Ariès has argued, the modern family does not have to be regarded as a vestigial institution struggling against the inroads of modern individualism but may be seen as a product of individualism itself, and a reaction to industrial and urban experience.

(*The City*, 145)

と言う Welsh は、「歴史」や「文化」を、単なる既存の社会的現実、事実ではなく、人々の都市での経験や「個人主義」といった思想的枠組みのように、作品が書かれた時代の人間の精神活動の所産として、つまり文化的言説として捉えていることになる。この視点は、従来の批評において、ヴィクトリア朝的な「性の抑圧や逃避」の例と批判された「家庭の天使」型の女性におけるセクシュアリティの欠如を、Welsh が、

The main error of reducing all the varieties of incestuous sentiment in Victorian fiction to repression, of seeing the triangular parlours of Victorian culture as evasions of sexuality, is that this negative explanation conceals from view the positive aim of such arrangements. The pressures on hearth and home are such that much more is longed for than sexual pleasure, much more is hoped for than domestic comfort. The heroines of hearth and home bear the modern burden of a relationship that has been construed in Christian times as incompatible with sex. (*The City*, 155)

と、当時の現実社会からの圧力と、キリスト教的な概念の枠組みとのせめぎ合いの産物と見て、そこにポジティブな意味づけをほどこそうとすることからも分かる。つまり、Welsh においては、社会的現実と思われるものも、それを経験する人々の精神活動や文化的な認識の枠組みとのせめぎ合いの中から産み出される一種のメタファーなのだ。その意味で、個々の作品や文学表象を規定する文化や歴史は、単なる歴史上の出来事ではなく、当時の人々の心に浸透していたより大きな物語の一部となっている。

ヴィクトリア朝小説の家庭にひそむセクシュアリティに鋭く着目し、「家庭の天使」が当時の社会や文化とのせめぎ合いの中で担う複雑な役割を明らかにして、Welsh は小説美学を中心とする従来の批評では評価されなかったディケンズのヒロインを肯定的に見直す複眼的な視点を提示し、以後のフェミニズム批評に貢献した。このことは、作家の個性や個々の作品間の差異を捨象し、19 世紀文化という共時的なコンテキストの中にディケンズの作品を置く Welsh の方法があつてこそ可能だったといえる。しかし、ディケンズの「都市」を、「天上の都」と「滅びの町」の二項対立のもとに意味づける Welsh の議論は、彼自身も認めるように(*The City*, vi)、ディケンズを、奇妙にキリスト教的でスタティックな作家と見せる危険がある。

同じ 70 年代に同じくディケンズにおける「都市」の問題を論じた Schwartzbach が、“What it[Welsh’s thesis] does obscure, however, is the development — often dramatic — of Dickens’ attitudes and their fictional correlatives over his long and varied writing career.”(55)と批判したのは、まさにこの側面だった。19 世紀という共時的視座からは捉えられないディケンズの人格とその「相関物」としての作品の「発展」を解き明かす ディケンズが描く都市像を、幼年期のトラウマを中心にフロイトの精神分析の方法を用いて跡づける Schwartzbach が導入したのは、Welsh に欠けていた通時的な観点だった。

2. Psychosocial な視点——From Copyright to Copperfield

Welsh が、1987年に出版した二冊目のディケンズ論を“an assault on Warren’s Blacking warehouse”と定義し、

While I would not deny that the episode was traumatic in some sense, I am expressly denying that a trauma in childhood provides the best ground for biographical criticism. This book is devoted to the time in early middle life when Dickens *recalled* his traumatic experience, to his sense of identity as a writer of literature, and to the three novels he produced in this period [. . .].
(*Copyright*, vii)

と書き始めていることから、*Copyright* は、Schwartzbach の批判に対する Welsh の解答と見ることもできるだろう。もちろん、Edmund Wilson 以来ほとんど定式化した、幼少時のトラウマとそれに基づくディケンズの人格の分裂や二重性の提示という精神分析学的手法に異議を申し立てるといふ、より大きな見通しもそこにはある。それが後に、過去のトラウマを探るフロイトの精神分析の手法を「成功への野心」を隠蔽しようとする19世紀的言説の産物として読み直す *Freud’s Wishful Dream Book* に結実したといえよう。

Copyright において、Welsh はまず、5つの長編小説を次々と発表してきたディケンズのペンの進みが急に鈍り、突然アメリカに旅立つ1842年からのディケンズ30歳代の10年を、E. H. Erikson の用語を借りて、「モラトリアム」つまり児童期の自己同一性をささえていた諸要素が、歴史的要求や社会的役割に一致するように再統合されるための猶予期間と定義する。その時期に、国際著作権法の提唱をめぐってアメリカ人から非難を受けたことでディケンズの同一性が揺らぎ、そこからより深い自己洞察が生まれて、作家としてのアイデンティティが確立されたというのである。このアメリカ旅行から自伝小説 *David Copperfield* 執筆にいたる青年ディケンズの自己形成の過程を、*Martin Chuzzlewit* 以降の三作を中心に跡づけるのが、*Copyright* の主意だ。

同じ精神分析でも、フロイトではなくエリクソンに依拠する理由を示しながら、Welsh は、この本の目的を、“a person’s interaction with the particular customs of a society”を解き明かすことと定義し、さらに、人生のあらゆる局面は“psychosocial” だとして、個人に対する文化や社会の影響関係を主張する (*Copyright*, 10)。それは *The City* で Welsh が取っていた文化論的な立場の踏襲だ。じっさい、Welsh は *Copyright* において、ディケンズがそれまでひた隠しにしてきた幼少時の秘密、靴墨工場でのトラウマティックな経験を、作家としての成功が確立されたあとに自ら語った事実に着目し、それを成功への野心を正当化しようとするブルジョワの社会的要請の産物と説明する。そして、その姿勢が、

個人の過去のトラウマを探るフロイトの精神分析の手法にも一致するとして、ディケンズとフロイトを 19 世紀という同じ文化的、社会的コンテクストの中に位置づけるのである。

作家ディケンズの「自己」が文化的社会的影響によって形成される過程を、伝記や手紙、そして作品など膨大な資料を用いて綿密に調査する *Copyright* は、いわゆる文化論的視点で書かれた新しい伝記批評の試みと言えよう。しかし、個人の経験や想像力の文化的言説への従属を、つまり主体の消滅を主張するはずの議論は、たとえば *Chuzzlewit* を“a fiction highly egocentric”(*Copyright*, 57)として、偽善者 Pecksniff から主人公である二人の Martin、そして Tom, Mark, Jonas など主要な登場人物のほとんどにディケンズの「自己」の投影を見るその手法によって、同時に確固とした作家の「自己」の存在を読者に印象づける。

さらに、「自己」の戯画化や神話化の手段として、Molière の *Le Tartuffe* や *Paradise Lost* そして *King Lear* や *Macbeth* といった Shakespeare との連関を論じる Welsh の議論は、*The City* における聖書や民間伝承とディケンズの都市および女性の表象との関わりを論じた部分と繋がりながら、作家による過去の文学作品のより意識的な援用の問題へと発展して、特定の作家の文学的想像力の特殊性を強調するように思われる。

The City において、すでに Welsh は、善良な「選民」であるディケンズ小説の主人公がその敵役とひそかなつながりを持つことを指摘し、そこにフロイトの *The Interpretation of Dreams* にもつながる 20 世紀的人間観を読みとっていた (136)。*Copyright* では、その傾向はますます強まり、最終的には成功への野心というブルジョワの神話に取り込まれるものの、Martin と Jonas、あるいは David と Heep の分身関係についての議論が示すように、19 世紀文化の枠組みを離れた 20 世紀的、あるいはモダニズム的側面を、作家ディケンズの「個」の特質として指し示すのである。その意味で、*Copyright* における論の重点は、*The City* に比較して、文化から文学へと大きく傾いてきたと言えるだろう。

3. 「文学」の復権——*Dickens Redressed*

Bleak House と *Hard Times* を扱う *Redressed* は、*Chuzzlewit* から *Copperfield* にいたる三作を論じた *Copyright* の続編と言えよう。先に述べたように、その「序章」で、Welsh は表題の意味を説明しながら、最近のジェンダー論の影響を示唆していた。*Copyright* で、Welsh は、主人公 David と Emily や Martha といった“fallen women”との関係を、

[...] it is almost as if the fortunate falls of *Chuzzlewit* and the tragic fall

of *Dombey* were displaced by *Copperfield*'s interest in fallen women: if the fall of an ambitious man can be conveniently displaced as temptation in childhood, as in the Oedipus complex, then a fall can be displaced onto women who are bought or seduced by men. (Copyright, 124)

と、ディケンズの「自己」の一側面が、女性の登場人物に置き換えられる一種の異装と論じていたから、女性の語り手に身をやつす作家という *Redressed* の議論は、*Copyright* から引きついだテーマでもある。しかし、cross-dress ではなく redress を用いた理由を“I prefer the idea of redressing because it preserves so many more of the root meanings of the verb, from the Latin *dirigere*, to direct.”(*Redressed*, xiv)と説明するように、*Redressed* における Welsh の主意は、作家が作品を自らの欲望に従って矯正し、変装するその技巧の解明なのだ。

Redressed で Welsh がまず注目するのは、*Bleak House* における二人の語り手の存在である。*Copperfield* が作家ディケンズの私的な「願望充足」の物語であれば、*Bleak House* は、その impersonal な表題や三人称の諷刺的な語り声が示すように、社会的なテーマを持つ諷刺的な物語に見える。しかし、Welsh によれば、父親 John Dickens と娘 Dora Annie の死の直後に書かれたこの物語は、作品世界に蔓延する死のイメージや、物語のいま一人の語り手で主人公の Esther と David との類似などが示すように、前作 *Copperfield* と同じく作家の「自己」が至る所に投影された egocentric な物語で、プロットも Esther の欲望が実現されるよう巧妙に操作されている。対照的に、*Hard Times* は、一見明確な主張につらぬかれた統一性のある物語と見えながら、じつは、読者が真の共感を抱ける主人公を持たず、功利主義に対するサーカスの娯楽や想像力といった物語の基盤をなす対立概念にも混乱がひそむ、中心のない物語となる。そして、*Hard Times* はその「開かれた結末」によって、Esther の“passive-aggressive”な声が社会諷刺を徐々に押さえ込むことで偽の満足感を読者に与える *Bleak House* へのエピローグとなっているというのが、その結論だ。

登場人物や物語のトーンなどさまざまなレベルでの作家の自己投影を解き明かす方法は、*Copyright* と同じく *Redressed* における Welsh の議論の中心をなす。*Copyright* において、Welsh は、David と Uriah Heep の分身関係を『聖書』のバテシバをめぐるダビデとウリアの物語の転倒の構図から読みとっていた。同様に *Redressed* でも、女王エステルを手がかりに、Ada と Esther の分身関係を論じ、Lady Dedlock や Caddy Jellyby などとの連関も交えながら、受動的でおとなしい Esther のひそかな願望が、他の登場人物をスケープ・ゴートとして充足されていく *Bleak House* のプロットの攻撃性を明らかにする。こうした自己投影の問題を論じながら、

Rather, he imagines his protagonist's part so intensely—whatever the biases of his own time and person—that *she* projects her feelings upon other actors in the drama, that *she* expresses her wishes without knowing it [. . .].
(*Redressed*, 35)

と言うように、Welsh は女性を主人公で語り手とした意味を問わないわけではない。しかし、ジェンダーの問題にさほど重きをおかず、むしろ彼の関心は、Esther の欲望がわれ知らず実現されてゆく *Bleak House* の語りとプロット展開といった作家の小説技法にこそある。それは、本の副題“*The Art of Bleak House and Hard Times*”からも明らかだ。

Welsh は、*Redressed* の「序章」で、自分の批評的立場を、文学と19世紀文化の共犯関係をあばき出す今日の批評と対比する。

I have long held that literature has to be appreciated historically and that literature indeed shapes as well as responds to the broader culture of which it is a part. But the idea that novels do just what the times require or language constrains them to do is a half-truth at best. If the idea were strictly true, it would be wholly uninteresting.
(xiii)

文学作品の生成と鑑賞における歴史的文化的な影響力の重要性を認めながら、文学が時代や言語の要請に完全に従属するという脱構築や新歴史主義的批評を“half-truth”としてしりぞける Welsh の議論は、“If the idea were strictly true, it would be wholly uninteresting.”という反論の言葉からも明らかのように、論理的に説得力のあるものではない。それどころか、J. Hillis Miller と D. A. Miller という脱構築と新歴史主義を代表する二つの研究を、

The latter Miller merely upstages the earlier; his reading is diachronic and his Foucauldian inspiration makes the system to which the novel is subject more ominous. Notoriously, *Bleak House* — and by extension any long Victorian novel — constitutes “a drill in the rhythms of bourgeois industrial culture.” Pity readers of the still longer novels of pre-industrial Europe and China.
(*Redressed*, 140)

と批判する Welsh は、D.A.Miller の引用を含む最後の数行の皮肉な調子が示唆するとおり、論理的というよりは、感情的にさえ見える。

しかし、二人の Miller の *Bleak House* 論のいずれもが、語りやプロットなどの小説技巧への視点を欠いている(*Redressed*, 140)と批判し、脱構築や新歴史主義批評を、

It ignores that Dickens [. . .] wrote precisely those novels that others did

not write and thus shortchanges his achievement—when it doesn't place him in the pillory outright. It distorts the way novels are ordinarily perceived, as productions of a particular author hoping for as many readers and rereaders as possible. For better or worse—that is, for pleasure and instruction or disgust and bafflement—*Bleak House* and *Hard Times* are Dickens's deliberately made stories as communicated in print. (Redressed, xiii-xiv)

と断じる Welsh の批評的立場は明らかだろう。個々の作品や作家の特質、さらには素朴な読書経験がもたらす実感などの重要性を主張する Welsh は、ここでいわゆる「文学」の復権を唱えているようだ。

おわりに

果たして *The City* から *Redressed* にいたる過程で、Welsh は自身の批評的立場を大きく変えたのだろうか。注意すべきは、Welsh の三つの批評書が出版されたのが、文学批評における重点が作品から文化へ、個の特質から全体的なシステムへと大きく方向を転換した 70 年代から 90 年代にかけてだということだ。つまり Welsh の批評は、彼をとり巻く批評の大きな流れに逆行するような形で、進展してきたことになる。

The City における「天上の都」と「滅びの町」の二項対立と、その代替としての「家庭の天使」という議論から始まって、作家の多様な自己投影と過去の文学作品の転倒や変装を語る *Copyright* や *Redressed* を読めば、Welsh の思考の枠組みにおいて、アナロジーとアンチテーゼの感覚がいかに重要な軸をなしているかが理解できるだろう。この同じ感覚は、たとえば *The City* に対する Schwartzbach の批判を取り込むと同時にそれに反論する形で、Welsh が同じ精神分析によりながらディケンズの社会的な自己形成の過程を跡づける *Copyright* を書いたように、作品の読解のみならず、自分自身の批評のスタンスを定める場合にも機能している。

文化論的な枠組みをいち早く取り入れたことから明らかなように、Welsh は自己の周囲に存在する文化（この場合は批評風土）の有りように敏感に反応し、それと同化しようとする衝動を持っている。しかし同時に、そうした文化の動きを転倒し、変容させるアンチテーゼとしての批評のあり方にも敏感なのだ。文化論やフェミニズム、精神分析や説話分析など 20 世紀後半の文化を形作るさまざまな思考の枠組みを借りながら、Welsh の批評がつねに独自の立場を提示しているのは、こうした二つの相反する衝動がバランスを取りながら存在し続けているからではないか。その意味で、Welsh の批評は、ひとつのイズムに収まりきらない豊かさや広がりを持っており、こうした外からの圧力と自己のスタンスをつね

に意識し続けている点で、彼の批評は自らが批評の理想的な形とした“a person’s interaction with the particular customs of a society”を実現していると言える。

Bibliography

- Auerbach, Nina. “Dickens and Dombey: A Daughter After All.” *Dickens Studies Annual*, 5 (1976).
- Ingham, Patricia. *Dickens, Women & Language*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Miller, D.A. *The Novel and the Police*. Berkeley: U of California P, 1988.
- Miller, J.Hillis. “Introduction” to *Bleak House*. Harmondsworth: Penguin, 1971.
- Poovey, Mary. “The Man-of-Letters Hero: *David Copperfield* and the Professional Writer.” *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*. Chicago: U of Chicago P, 1988.
- Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Schwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: Athlone, 1979.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. Stanford, Calif.: Stanford UP, 1983.
- Tomalin, Claire. *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*. New York: Alfred A. Knopf, 1991.
- Waters, Catherine. *Dickens and the Politics of the Family*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Welsh, Alexander. *The Hero of the Waverley Novels*. Princeton: Princeton UP, 1963.
- . *The City of Dickens*. Oxford: Clarendon, 1971.
- . *Reflections on the Hero as Quixote*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- . *George Eliot and Blackmail*. Princeton: Princeton UP, 1985.
- . *From Copyright to Copperfield: The Identity of Dickens*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1987.
- . *Strong Representations: Narrative and Circumstantial Evidence in England*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1992.
- . *Freud’s Wishful Dream Book*. Princeton: Princeton UP, 1994.
- . *Dickens Redressed: The Art of Bleak House and Hard Times*. New Haven: Yale UP, 2000.
- . *Hamlet in His Modern Guises*. Princeton: Princeton UP, 2001.